「地域の方がたの役に立つ」をモットーに
―― 移動する八百屋「つどや」小川 豊さんに聞く

取材当日、約束の場所、横山台タウンハイツの集会所に徒歩で近づいて行くと、よく響く笑い声が聞こえてきました。さらに近づくと、その声の主は移動販売車「つどや」の店主・小川豊さんであることがわかりました。お客さんとの会話に花が咲いているようです。

「つどや」は移動する八百屋・野菜の移動販売車です。小川さんは、販売に行く場所を井戸端会議の場のように、日々の生活に欠かせない集いの場所とさせていきたい、という思いをもって店の名前を「つどや」と名付けたそうです。

この秋30歳を迎えるという若さでありながら、なぜかお客さんに「43、44歳じゃないの?」と言われているそうです。何故でしょう?

良い物を安くお客さんに届ける

２０１９年４月、小川さんは「つどや」を立ち上げました。今年４年目になります。それ以前は、東京農業大学を卒業した後、農業関連の会社に４年間勤めました。野菜に対する関心と、地域のために役に立てることがしたいという思いが強かった小川さんは、売上を重視するのではなく、お客さんと会話を楽しみながら野菜の魅力を伝えたいと、独立を決意したそうです。

その頃、「買い物難民」という言葉がニュース等でたびたび聞かれていました。「だったら、店を構えるのではなく、移動販売という形でお客さんの元まで野菜を届ける店にしたらいいのでは。時代にも合っているし、自分が重視するお客さんとの会話も叶うのでは…」と考え、移動販売車として店を始めることに。

野菜の仕入れは、相模原の農家など、地元で採れた野菜や横浜市場から全国各地の野菜を仕入れているそうです。でも、譲れないのは「良い物を安くお客さんに届ける」という理念。

農作物の栽培技術を開発する㈱プラントライフシステムズ（ＰＬＳ）には、その理念を理解され、ＰＬＳ相模原農場で採れた糖度の高いミニトマトを出荷していただいているそうです。また、ＰＬＳから託されて、こども食堂で使ってもらうミニトマトを社会福祉協議会へ届けるボランティアの役目も行っているとのこと。

他にも、相模湖ひぐらし農園の野菜は、栽培期間中、農薬、化学肥料不使

用で、変形やキズあり等の規格外の野菜も仕入れており、お手頃な価格で販売しています。規格外品を販売することにより、食品ロスの削減にも繋がるそうです。

（左から）横山台タウンハイツ自治会長の本田さんと「つどや」の小川さん

人の繋がりから広がって行く販売場所

現在「つどや」は、飲食店や個人宅の駐車場、団地等、市内6か所で販売を行っています。

最初は軒先ビジネスの会社を利用し、上鶴間のブックオフの駐車場で販売をスタート。その後、横山台にあったマッサージ店の駐車場で。でも、その先は、お客さんから「良かったらうちにも販売に来てくれない…」と声をかけられ、相模原の麺屋ひばり等、次第に販売場所は広がって行きました。

さらには、社会福祉協議会からも声がかかるようになっていきました。また、子ども食堂への寄付で社会福祉協議会に相談したときに、市営上九沢団地で実施されている「子どもの育ち応援団」代表の吉澤肇さんを紹介していただいたそうで、そこで市営団地の現状を知り、市営団地での移動販売の重要性を感じたそうです。

協力者、理解者を得て

様々な繋がりにより販売場所が広がる中、横山台タウンハイツの集会所も繋がりから実現されました。かつて、別の販売場所で小川さんと知り合いになったタウンハイツ自治会長の本田真規さんが、「団地の中でも販売したい」という小川さんの希望を耳にし、さらに団地住民からも移動販売車が来てくれれば助かるという声を聞き、県に働きかけました。基本的に団地の中では金銭取り引きは禁止となっています。県の職員に移動販売車の話をしても最初はダメだったそうです。

しかし、何度か話をしていくうちに心情的には理解を示し、『つどや』がここでの売り上げの一部を自治会に寄付することにし、そのことを書いて貼り出して販売をしたらどうですか」と県の職員が知恵として言ってくれたそうです。しかし、小川さんは県の職員の配慮を受け入れませんでした。他の販売場所との兼ね合いや、先々のことも考えたのでしょう。

その後、本田さんが別の用件で県職員と話をする中で、職員から「あちら

こちらで、移動販売車があるようですね」という話が切り出され、口頭で許可が得られ、集会所前で「つどや」は販売を始められるようになりました。

市営団地にも移動販売車を
ーそれは必要とする人のメリットに

小川さんは言います。「県営や市営住宅は公営のため、営利目的とみなされる移動販売は、様々な障害があります。しかし、実際に団地の住民のみなさんが移動販売車を必要としていて、横山台タウンハイツや県営上溝団地のように、自治会さんや社会福祉協議会さんとご相談の下でできるようになった場所もあります。県営上溝団地には大手スーパーの移動販売車も来ていますし、現実問題として、住民の高齢化により買い物が困難になっているという現実を理解してくださっているのだと思います」。

県は柔軟な対応で住民のみなさんに寄り添おうとしていることがわかります。

しかし、相模原の市営団地は、現在、移動販売車が入ることはできていません。

お客さんにスマホの操作を教える小川さん

市営上九沢団地は、90代のひとり暮らしの人が7人お住いだと、子どもの育ち応援団の吉澤さんからうかがいました。高齢者が多く、なかなか買い物に行くことができない人がいたり、見守りも含めて移動販売車に入ってほしいという声があったりして、以前から住民が市に要望していたそうです。「前例がない」と最初は完全にノーだったといいますが、今は変わりつつあります。この件に関して6月定例議会では、颯爽の会の野元議員が質問もしました。そういう経緯を経て、8月には、市営住宅課は上九沢団地の管理組合に聞き取りに行くなどし、実現に向け、積極的に動き始めているそうです。

「できないところをどうしたらできるかというふうに持って行かないと絶対に進みません。そのためには、相模原市の市営住宅課さんだけでなく、福祉的な役割も担うことから地域包括ケア推進課さんや社会福祉協議会さん、地域包括支援センターさん等、地域全体で考えていく必要があると思いますし、相模原市はSDGs未来都市として〝誰一人取り残さない持続可能なまちづくり〟をするのであれば、高齢者にもっと寄り添う必要があります。ですから、〝横の繋がりを持ち、地域全体で取り組みをしていこうよ〟と、私自身様々な所へ出向いて、連携させる働きかけをしている最中です。

これは私にメリットがあるからという話ではなく、そこに住んでいる方の問題を解決することが一番の目的です。そのため『つどや』でなくても、たとえば大手スーパーの移動販売車さんなり、他の移動販売車なりがそこに入れれば、買い物支援になるのですから」。小川さんの思いのこもった話は聞く人を圧倒します。

「県は実際に動いていますし、横浜市でも川崎市でも、すでに市営団地に移動販売車は入っています。同じ政令指定都市でありながら、なぜ相模原市はできないのだろう…」小川さんが抱く疑問は、誰もが抱く疑問です。

「接客3割・雑談7割」

お客さんと小川さんの様子を見ていると、スマートフォンをお客さんに教えてあげている姿が目に入ります。何を教えているのかを尋ねると、LINEの使い方やLINE情報の見方を教えているのだといいます。他にもキャッシュレス決済の方法など教えることがあるそうです。

スマホのことだけではありません。お客さんが困っていることにも、可能な限り対応しているそうです。〝瓶の蓋を開けて欲しい〟〝椅子を組み立ててほしい〟など、今まであったそうです。また、「スイカを買いたいけど重くて持って帰れない」と言っているお客さんがいると、他のお客さんが「私が店番をしててあげるから、家まで運んであげて」ということも、信頼関係ができあがっている小川さんとお客さんの間では時々あるそうです。

〝客と販売者〟ではなく、〝人と人のつきあい〟をしている小川さんは、「『つどや』は野菜を届けるということだけでなく、日常の幸せを分かち合い、共有し、何気ない日常から幸せを見出していければと思います」と語ります。

独立時に、小川さんが店の名前にこめた「井戸端会議の場のように日々の生活に欠かせない集いの場所となりたい」という思いが、すでに実現しているようです。

（取材 山田）